

## 文化・芸術

「Le Femme(女)」

1952年、油彩、紙  
90・9センチ×65・2センチ

菅井 汲 (1919～96年)

現在展示中の「原爆の図」が、桐生市内で公開されたのが1951(昭和26)年2月のことでした。また、「終戦後」という言葉が、リアルに使われていた時代でした。前回の「名画の扉」に、「戦後の美術をふりかえると、日本は世界に開かれ、一方で世界が日本を発見したことも忘れられません」と書きました。

52年、そうした日本を離れ、新しい芸術に憧れて単身パリにやってきた青年がいました。菅井汲です。初期の作品をみると、日本のフォークロア(民俗的)のイメージが強く、それがパリの美術界で、異国趣味ともまじりあって新鮮にうつったのでしょうか。豪胆で土俗的なイメージの一方で、絵肌を神経質にひっかいたり、金箔(きんぱく)をつかうなど、大胆さと繊細さが融合しています。

もっとも菅井は、競争のはげしいパリで評価されるように、「日本的」であることをオリジナリティーとして巧みに取り入れていたのかもしれない。

(田中)

〈名画の扉〉

大川美術館から

